

名古屋と周辺地域の口演童話活動

—明治末から昭和前期まで—

磯 部 孝 子

口演童話と言うのは、文字通り、語り手が聞き手を前にして、口頭で聞かせる子ども向けのお話のことであり、読ませるためのお話と対置される。しかし、これは、語り聞かせ一般を総称することではない。長い語りの歴史の中で、口演童話は、明治という時代と社会を背景に生まれ、大正から昭和前期にかけて日本中に広く行きわたった、独自のスタイル（型）をもつ語りなのである。

「童話」という語が定着するまで、幼い子ども向きの読み物のことを一般に「お伽噺」と呼んだ。「お伽噺」は、巖谷小波（1870－1933）の作りだした語である。「お伽噺」に比べて、より文学性と近代性を持たせた「童話」が、用いられるようになるのは、1918年（大正7）に鈴木三重吉（1882－1936）によって創刊される童話雑誌『赤い鳥』以降といわれる。従って、読む童話と区別するために、語る童話を「口演童話」と呼ぶようになるのは、それより後ということになる。「口演童話」は他に、「お伽口演」、「実演童話」、「講演童話」とも呼ばれた。童話が口演される会を、一般的には「お話会」と言うが、「お伽噺（話）会」、「お伽講演会」とも言った。

子どもたちにお話を聞かせるということを考えてみると、日本では、ずっと以前から日々の暮らしの中に祖父母に代表される〈昔語り〉がある。口演童話に限らず、子どもたちは、目の前で語る話し手の表情によって、非日常の世界に思わず引き込まれてしまう。そこには幾世代をも経て今なお生きている民衆の心を伝えるものも少なくない。語りとは、話の楽しみを共有する場であり、話し手がお話に込めた大切なものを聞き手に手渡し育む行為である。

囲炉りばたでの〈昔語り〉、図書館の児童奉仕としてのストーリーテリングなど、種々の語りがある中で、口演童話の特徴は、まず第一にそのスタイルにある。口演童話が行われたのは、初期において、主に学校教育の場と、子ども会や青年会などの社会教育の場、その他に主催者が一般に呼びかけてお伽噺会を開く場合が多かった。マイクロホンのない時代に聴衆が百人、あるいは千人を超えることも珍しくなかったようである。したがって、聴衆すべてに伝わり楽しんでもらうことのできる話し方が必要とされた。

こうして生みだされた語りのスタイルは、おおよそ次のようにまとめることができる。口演者は、舞台の中央部に足を左右自然に開いて立ち、動きは主に上半身に置く。お話の初めに導入部を置き、アドリブを交えながら聞き手の注意力を引きつけ、童話の世界に誘っていく。舞台でいう上手と下手

を使い分けながら、対話形式を多く用いてストーリーを進行させ、ジェスチャーや擬音、時には小道具を使用することもある。ことばは、通常共通語（かつての標準語）が用いられる。

また、口演されるお話には、新しい素材をもとにした創作や、昔話や伝説のような伝承、外国のものも少なくない。口演童話家は、原作のある場合にも、必ずしもそのまま再現しようとはしない。むしろ、自分が大切だと思うところを子どもたちに伝えようとする。つまり、原作は、口演童話家のなかで消化され再構成され、彼自身のことばで語られるのである。

ところで、口演童話が始められたのは、明治の中期、日本が西欧諸国をめざし社会が大きく転回し、もう一方では国粋主義が台頭してきていた。少しずつであるが就学率の上昇と、子ども向けの雑誌や図書の出版が見られ、子どもの存在が社会的によりよく認知されるようになってきた頃である。

そして、口演童話の創始と発展に尽くしたのは、巖谷小波、久留島武彦、岸辺福雄の3人であった。1894年（明治27）以降、お伽噺作家として知られていた巖谷小波は、1896年に京都のある小学校でお伽噺を語ったことがあった。これが口演の初の試みであったという。この時小波は、「話す」お伽噺の重要性和難しさに気付いたのであろう。やがて、話芸に長けた久留島武彦（1874-1960）とともに、童話の口演を実践するのである。武彦は、1903年（明36）に横浜のメソジスト教会で「お話会」を開催、日露戦争の後の06年には、東京神田のキリスト教青年会館に「お伽噺倶楽部」を作り、毎月「お伽講話会」を開いた。09年（明42）からは、博文館の愛読者のために、小波と武彦は二人で全国を巡回しお伽の会を開いた。これがたいへんな人気を呼び、これをきっかけとして各地にお伽噺倶楽部が次々と生まれる。同じ頃、教育の場で口演童話を行っていたのが、1903（明36）に東洋幼稚園を創立した岸辺福雄（1873-1958）であった。また、武彦は10年（明43）回字会を、福雄は20年（大9）に喃々会を組織して後継者の育成にも努めた。

こうした口演活動が、名古屋と周辺地域においては、大正期より本格的に始まっている。その後急速に広がり、太平洋戦争中一時中断することはあったが、戦後まもなく再開され、現在も比較的盛んに行われている。そこで、本稿では、大正から昭和前期に至るこの地域の口演童話活動の始まりと発展の様子を、主要な活動を中心に述べながら、なぜこの地域で、このように口演童話活動が盛んに行われていたかを考えてみたい。

第1章 明治末に始まる、いとう呉服店の「こども会」

（1）胎動期としての明治期

名古屋と周辺地域においては、すでに明治後期に口演童話が聞かれていたが、この地に住む人たちによる本格的な口演童話活動は、大正に入ってからのことである。しかし、個々の事実の記録は少なく、触れることのできた明治期の記録は、子どもの頃に口演童話を聞いた大西巨口と小池長のことと、いとう呉服店の「こども会」のわずか三つであった。

大西巨口（1888-1971）は、名古屋地域で初めて口演童話活動を開始した名古屋新聞社お伽団の主要メンバーの一人だったが、11歳の頃、京都西本願寺の子ども会で、巖谷小波と久留島武彦の童話を聞いたという。その時の「五色の魂」を語る武彦の巧みな童話術を思い出しながら、「これが童話に接

した最初で、それから話すことに興味を持ったんだ。まだ、創作はできないので、いろんな本を読んで、話を覚えたり、自分なりに脚色したりして、中学校時代、その後、早稲田大学専科の時代にもよく子供会にひっぱり出されて話をした。」と述べている。（『東海人間模様 65』；『毎日新聞』1967. 1. 26. 夕刊）

また、大正後期から势力的に活動を始め、昭和期を通じて、全国的にも活躍することになる小池長（1901-74）も、1911, 2年（明44, 5）頃に話を聞いた時のことを著書『話道のあしあと』（1930）に書いている。

尋常四年の頃であったと思ふ。今の名古屋市東田小学校長の長江鎌次郎先生が、学芸会の終わりに「金馬將軍」のお話をなさった。聞いて居る中に学校を忘れ、自分を忘れて、お話の変化に胸をおどらせて思はず飛び上がって喜んだものであった。今も其時の話を思い出すとその場面がありありと眼前に浮かんで来る。本当のような気がして霞の奥の夢を思ふの愉快を感じずが、八ヶ年の国民教育中、此の話程私を喜ばし、面白がらせ、魂をゆり動かしてくれたものはなかった。……あのようなお話がして見たい、僕も話がうまくなったら、あれ位話せるやうになるかもしれない等と思いつつ、雨降りの体操の時間に下らぬ話を繰り返したり、村の学芸会で暗いランプの下で大気焔を挙げたものであった。（pp. 26-27.）

小池長の回想は実に生き生きとして、お話の世界に夢中になった子どもの心の様子が手に取れるようである。長は、8年間の在学中で最も心を動かされたものは、お話だったという。お話の魅力は、語り手の聞かせる力と同時に、お話そのものの面白さにある。学校の教室や家庭で、それまで得られることの少なかった面白さが、そこにはあったのであろう。祖父母の昔語りにはない話題の広がりや、学校の先生の話にはないストーリーの展開と巧みな話術に、たとえ時代の風潮に沿った勤労勤勉や忠孝などの教訓が織り込まれていたとしても、子どもたちはそこに、今までにない新しい息吹のようなものを感じたのであろう。

そして、長の少年の頃、長江鎌次郎のようなお話をする先生が、明治の終わりに、すでにいたという点が目を引く。長江鎌次郎は、愛知県第一師範学校本科を1904年（明37）に卒業し、その後、20年（昭5）には名古屋市東田小学校（現在の新栄小学校）の校長になっていた人で、おそらくその日は、学芸会でお話をするために、招かれたのではないか。やがて長は、大正中期に鎌次郎の出た師範学校に入学するが、学芸部の講演行脚で「太閤餅」を、弁論大会で「幽霊大尉」の話をしていることから推測すると、当時、講演や弁論の場において、偉人伝やストーリー性の強いお話をするのがごく一般的だったのかもしれない。

一方、巨口の方は東京を経て名古屋新聞社へ入社、また長は愛知第一師範学校から名古屋市呼続小学校へ移り、それぞれ別の仕方で口演童話活動へと入っていくことになる。

（2）いとう呉服店の「こども会」

子どもたちを楽しませようと、年1回のお話会を28年間開いた百貨店がある。それは、いとう百貨店（現在の松坂屋）で、得意先の子どもたちを招いて新年に「こども会」を開いたのである。第1回は、1911年（明44）1月14, 15日の2日間で、この時が、名古屋と周辺地域で、お話会を開催して子ども

たちに口演童話を聞かせた最初である。

この会には、巖谷小波や久留島武彦をはじめ、数人の口演童話家と、その他の出し物との組み合わせで、第1回には、小波、武彦、木村小舟、鈴木吉之助によるお伽噺、児童狂言（こどもきょうげん）、活動写真などが催された。第1回の「こども会」は、14日に1回、15日には午前午後の2回で計3回開演され、いずれも好評を博し、以後1938年（昭13）の第28回まではほぼ毎年のように行われ、いとう呉服店の名物の一つとなった。従来、『童話人』5-8（1957年8月）に掲載された小波、武彦らの姿が見える写真⁽¹⁾から、遅くとも1910年（明43）には「こども会」が開かれていたと推測されていたが、このたび松坂屋の社史によって上記の期日であることが確かめられた。

ちなみに、いとう呉服店の「こども会」が、どのような状況で開催されたかを次に説明しよう。いとう呉服店が、新店舗を栄町交差点南西角（現在マルエイスカイルの位置）に移し、木造3階建ての洋風建築物に建て換え、売り場も名古屋で初めての陳列・立ち売り方式を採用した「デパートメントストアいとう呉服店」として開店したのは、1910年3月1日であった。いとう呉服店の開店後まもなく、3月16日には、鶴舞で「第10回関西府県連合共進会」が開催され、さらに、4月12、13日には名古屋開府300年の記念大祭や大祝賀行列などが催されており、市内は共進会一色となる。こうして見てくると、共進会に先立ついとう呉服店の開店は、この市内の盛況の先頭をきるものであった。

また、東京日本橋の三越は、04年（明37）全国に先駆けデパートメント方式を取り入れ、08年には洋風木造3階建ての仮営業所を設け、09年にはおもちゃを中心とした児童博覧会を催しているのである。上野店のいとう松坂屋もまた、07年に洋風の店舗を建てるというふうに、主要な呉服店の百貨店化の機運が起き始めていた。

名古屋城の真南にあたる茶屋町（現在の外堀町本町）にあった旧店舗は、江戸期からの平屋の店構えで、呉服だけを扱っていたものと思われる。従って、いとう呉服店にとってこの新しいデパートメントストア開店にける意気込みは、なみなみならぬものがあつたはずである。こうした時期に、購買層拡大のためであろう、様々な催し物の中で「こども会」が開かれたのである。

なお、「こども会」の内容については、断片的にしか記録は残されていない。第1回についてはすでに述べたが、第12回から第15回までと、第17、19、22回に久留島武彦が、第16、18、21回には天野雉彦が出演している。期間もまちまちだが、3日間がもっとも多い。場所も、第12回までは300人収容可能な3階ホール、その後茶屋町の伊藤銀行ホールで3回、第16回は不明、第17回からは南大津通りに新しく建てられた松坂屋の6階ホール、第27、28回は、改築された松坂屋7階ホールで行われた。

ともかく、明治末より昭和前期まで28年間に及ぶ、いとう呉服店の「こども会」の開催は、得意先の子どもだけを対象にしたとはいえ、多くの子どもたちに口演童話の楽しさを伝えてきた。長期に渡って継続されたことは、少なくとも口演童話を理解する一定の層を築いたといえることができる。また、もう一つの影響として、口演童話に関心のあつた人々に、全国的に活躍する一流の童話家の口演に接する機会を与えてくれたことである。確かに、「当時の百貨店が文化的にも一つの役割を果たした」といえよう。⁽²⁾

第2章 口演童話活動を始めた名古屋新聞社お伽団

(1) 野外口演童話活動の始まり

寺院や百貨店が行った子ども会や学校教育の場などで、口演童話を聞いたり見たりした子どもや大人たちが、少しずつ増えていた。同時に、そのような場で童話を実演する人たちや、それを志す人たちも出た。しかし、口演童話を知る人は、社会全体からすれば、まだごくわずかだったが、1916年(大5)の夏の出来事をきっかけにして、名古屋を中心に、口演童話が一種のブームのように一般の人々の間に広まっていく。

当時、名古屋新聞社の社会部記者だった亀山半眠(本名六次、1878-1945)が、同僚で10歳年下の大西巨口を誘って、中区東田町(現在の新栄町)白山神社においてお伽噺会を開いたのは、1916年(大5)6月末、または7月の始めであった。^③これが、この地域で初めて地元の人々によって行われた口演童話活動といわれている。

亀山半眠がお伽噺会を開くことになったきっかけについては、巨口の「童話五十年の懷古」(名古屋童話協会『大西巨口と兎の耳』)の中に詳しい記述がある。それによると、半眠が学区内の集会に出席したとき、白山神社の氏子の代表から、神社での子どもたちの横着ぶりが訴えられ、暑中休暇を控えて頭を痛めているという話が出された。そのことを気に止めていたのであろう。半眠は、後日、神社で遊ぶ子どもたちの様子を見ながら、お伽噺会の開催を思いつく。新聞記者であったことから、すでに百貨店で子ども会や各地で始められていたお伽俱樂部などのお話会のことを知っていたであろうし、何か子どもに楽しくて潤いのあるようなことをしてやれないかと考えたのであろう。

半眠に誘われた巨口は、話すことには子どもの頃から関心があったので、その日の夕方ラッパのついた蓄音器と提灯を二つ持って神社へ出かけた。近所の子どもたちには、その前日に神社の拝殿にお伽噺会の案内を貼りつけて知らせたり、また半眠の息子たち(長男巖は後の名古屋タイムズ社長)によって伝えさせた。半眠はグリムの「お菓子の家」と「親指姫」の話を、巨口は同じく「3人兄弟」を語った。巨口によると、この時、白山神社でお伽噺会を3夜連続で行ったという。間もなく、同じ名古屋新聞の記者で、音楽にも通じた浜田南国が加わることになる。

試みに行ったお伽噺会で、半眠らは、予想以上に子どもたちの反応に手応えを感じたものと思われる。白山神社の次には、始めて名古屋新聞紙上でお伽噺会の予告を出す。7月3日「子供諸君」と見出しを付け、5日の若宮神社での会を知らせる。そして、同会のことを再び8日の紙面で取り上げるのである。これは、『児童の為の新しき試み』と題する論説で、m生と記してあるが、おそらく半眠らの考えの代弁と思われるので、ここで詳しく見てみよう。最初に、長期休暇などの「学校以外の児童の生活」について問題を投げかける。

……然れども、児童の生活は学校よりも学校以外に於ける方遙かに時間多きものなれば、学校以外に於ける世話等は閑に附することが出来ぬ、固より此等の世話に対しては各自の父兄が當然負擔すべき性質のものであるが、児童の生活は家庭に局限されず父兄の目から外にある事が多いのであるから、其の間に處する養護の方法を講ずる必要がある、
(『名古屋新聞』 1916. 7. 8. 振り仮名省略、以下同様)

学校外の子どもの生活を親だけの問題ではなく、広い立場で「養護」の必要を訴えている。養護の方法として、「児童に自由活動時に於る自治組織を精神としたもの」、「少年義勇軍の組織（のようなもの）」の他に、「夏期に於いて夜間に神社佛閣の境内にお伽噺の講筵を開く」ことを上げている。これに続いて、半眠たちが開いたお伽噺会を紹介する。

5日の夜我社中の両3人が若宮神社の境内においてお伽講筵をこの趣旨によりて開いたのであるが、頗る児童等の興味を引き起こしたのみならず、大人までも面白く聴聞していることを見た……我社中の同人は家に居て自分の子供に昔話を聞かすと同じ時間と同じ労力とで、他の幾人かの児童に歓喜を分かち得るならば、その方が公的で趣味が深いと云う見地から露天お伽噺を開始したのである……（同上）

お伽噺会を行うという大人の些細な努力が、近隣の子どもたちを喜ばせることができた。ここには、周りで見守っていた大人たちをも楽しくさせる心暖かいものがあつた。そして、お伽噺会が子どもの生活の様々な場面で活用されることを提案している。さらに、「若しも斯る企てが広く世に行われて、開放されたるお伽講演が翠滴る鎮守の森蔭や、川風涼しき岸邊の砂の上で催さるゝならば、……児童の養護上少なからず裨益があると信ずる。」（同上）とつづける。

ここでは、1神社の子どもたちの無法ぶりではしかなかった事柄を、家庭と地域における子どもの生活の中の一般的な問題として捕らえ、学校外の子どもの生活に目を向けるように、人々に促している。学校外の生活において、子どもたちを放任したままにせず、周囲の大人たちの心がけで、楽しくても満足いくようなことを用意してやることが、子どもにどんなに有益であるかを訴えている。お話会の実践を通して得たこの主張には、かれら記者たちの鋭敏な時代感覚と子どもに対する柔軟な見方が伺えるのである。このような考えは、その後の半眠らの活動に具体的に現れていく。

（2）名古屋新聞とお伽団1年目

半眠、巨口、南国が名古屋新聞の記者だったことから、かれらの口演童話活動に関する記事やお知らせが早くから同新聞に掲載される。とりわけ活動が開始された2か月程は、かなりの回数にのぼる。まず、3、4日ごとにお伽噺会開催を知らせる「子供諸君！」欄が、7月3日に続いて11日からは本格的に始まり、ユーモラスに呼びかける。

子供諸君！去る5日我々が若宮八幡の境内にて致したお伽噺は大分神様達のお気に召したと見えて上茶屋町那古野神社からも来て2つ3つ話せよとのことでもありますから今晚（11日）8時から同神社境内で面白いお話を致しますから同社の近所の子供さん達の御來聴を乞ひます（半眠、南国、巨口）

25日の6回目の「子供諸君！」で西区幅下浅間社浅間神社での会が「第八回お伽噺会」として案内されていることから、半眠らの初期の口演活動を推定すると。第1回が中区の東田町白山神社（6月末、または7月初め19時）、第2回が末広町若宮神社（7月5日19時）、順に列举していくと、上茶屋町那古野神社（11日20時）、富士塚町富士浅間神社（14日19時半）、菅原町天神様境内（18日20時）、正木町闇の森神社（20日20時）、赤塚神明社（23日20時）、そして西区の浅間神社（25日20時）が第8回となる。以後、お伽噺会は、ほぼ同じペースで続けられ、「子供諸君！」の欄で知らされる。

また、7月22日から「お伽噺会より」という欄が始まり、各お伽噺会の様子や新聞社に寄せられる反響などを読者に直接語りかける。この欄は、7月22日から8月11日の間に5回掲載され、この後も時折見られる。

時期を同じくして、今度は「お伽噺会へ」という欄が始まり、7月28日から8月5日まで5人の有識者の意見が次々と連載される。その筆者は、熱田神宮宮司岡部譲のほか教育に関わる人4人で、各々賛同意見を述べている。この中の、市立第1高等小学校長の内藤晶は、お伽噺会の開催場所に注目し、「殊に児童には此の意志の自由に任せるといふ事が必要であるから」、お伽噺会場を途中出入りのできない講堂などではなく、「出入りの自由な神社の境内」に置いている点を評価している。また、県立第1中学校長の日比野寛は、暑中休暇中の宿題や林間学校での学科の復習に疑問を投げかけ、それよりも「無邪気に遊ばせるがよい」とし、「この点からいっても貴社の御伽噺会は最も時機に適したものと推奨する」と述べている。市立第1高等女学校長の檜山友蔵は、子どもの欲求という観点から問いかける。

児童少年は元気の塊りで、常に何事かを欲求して止まざるものである。今日の学校や社会は果たして此の欲求を満足させつつあるであろうか……今日、児童少年用の雑誌や絵本の如何に流行しつつあるかを見ても小供が欲求の満足に困しつつあるかゞ知れる、併し是等のものに単に眼からの精神的欲求の一部を満たすのみである。耳からのものは殆どない、我國は小供の天國だといふが何處に其の設備があるか、特に都会の夏は小供の運動に銷夏に甚だ不便を極めてゐる、此の時、莊嚴森々たる神社で神の如き心と聲で、神の如き天真の児童に、お伽噺を聞かせるといふ事はそれこそ、小供の天國の出現といつてよろしからうと思ふ、

(『名古屋新聞』 1916. 8. 3.)

子どもの自由意思の尊重、長期休暇の意義、子どもを取り巻く文化・環境の不備などの指摘には、いずれも子どもを中心に置く当時の新しい教育観が見られる。教育会の指導的立場にある人たちもまた、実用と教訓中心の御仕着せ教育の限界に気付いていた。教育関係者が新聞の紙面で支持を表明したことは、半眠たちの取り組みが、従来の教育に欠けていたものを子どもの心と生活に補い得ることを保証したことにもなった。

何よりも半眠たちに自信を持たせたのは、お伽噺会に毎回子どもたちや大人たちが数百名集まったことだった。まもなく、半眠、巨口、南国は「名古屋新聞お伽団」を結成する。その「お伽団」の名が名古屋新聞に初めて登場するのは、8月10日である。活動範囲が次第に広がり、8月8日には、知多郡（現在、常滑市）大野町でのお伽噺会を初めとして名古屋近郊にも出向くようになり、その案内が掲載され始める。また、同じ23日からは、遠く広島高師お伽会の伊藤康壽の寄稿による「お伽噺に就いて」が始まり、4回連載でお伽噺の意義、話の仕方などを説いている。

この最初の年に行われた「名古屋新聞社お伽団」によるお伽噺会の回数を、「子供諸君！」欄によって数えてみると、9月末までの3か月間に確認できただけで43日47回開演され、12月までにさらに23日31回加え、合わせてほぼ66日78回の多きに及んだ。主な会場は、市内ではほとんどが神社であって、一部小学校が使用されているにすぎないが、名古屋市の周辺地域のお伽団の口演が増えるにつれ、小学校などの公共の建物や寺院の使用が増加している。また、同時にお伽噺会とお伽団に関連す

る記事が連日のように紙面を賑わせており、最初の1か月余りの間に22回を数えた。

このように、口演童話活動についての情報が、名古屋新聞を通して頻繁に流されたことは、一挙に口演童話の知名度を高め、これによって子どもだけでなく広く一般の人々の関心をも呼ぶこととなった。中でも、教育関係者の賛同を得たことから、教育の現場でも口演童話に取り組む人が次第に増加し、やがてこの地域の口演童話界の核の一つを形成していく。また一方では、名古屋新聞社にも販売紙数の拡大という副産物があり、一層お伽団の活動に力が加えられた。また、その背景に娯楽に飢えていた子どもの姿があったことも見逃せない。

(3) お伽団と『兎の耳』

2年目の1917年(大6)もまた、1年目と同様にお伽団の活発な口演活動が続けられる。前年は3人1組で行動することが多かったが、この年から1、2人で各地へ赴いたため、1日に数か所で会を開くことが多くなった。やがて、お伽団に太田雅光が加わり、お伽噺会の出張日数は夏期3か月間に44日と変わらないが、開演回数は75回と増加している。主な会場は、神社から小学校に移り、会の目的も子ども向けのお伽噺会のほか、一般の同窓会や青年会などの地域の集いからのお伽講演の依頼が目立った。とくに、名古屋市周辺地域での開催が増加し、夏期75回のうち20回を数えた。

1918年(大7)以降、活動はやや減少するが、24年(大13)まで、巨口が中心となって活発に続けられる。「子ども諸君!」、あるいは「本社お伽団講演日程」欄などによるお伽団の活動案内は、19年(大8)で終わり、翌年から日曜日の「こどもくらぶ(子供倶楽部)」欄などに学校行事や子ども会ごとの催しとして伝えられるようになると、お伽団だけではなく他のグループや口演童話家の活動もまた知らされることになる。だが、25年(大14)に入ると、お伽団の名称は名古屋新聞からふつつり消え

賀祝式子太立
會大噺伽お
會開時一後午日一十三月十
て於に堂事議會縣知愛
絶謝は方い無の券場入
(す付送はに校學各?)
南 巨 半
因 口 眠
■す呈を品念記に者會來■
前午日本は校學小きな込申數童兒望希
いさ下でん込申念至に迄時十
社聞新屋古名催主

「立太子式祝賀お伽噺大会」を知らせる案内
(1916年10月30日付『名古屋新聞』)



愛知県会議事堂前で入場を待つ子どもたち(下)と
会場内の様子(上) (同左11月2日付新聞)

てしまう。それは、ちょうど巨口が名古屋新聞社を退職するのと時を同じくしている。

その間に、「名古屋新聞お伽団」は、16年（大5）10月31日に愛知県会議事堂に4000人の子どもを集めて開かれた「立太子式祝賀記念お伽噺大会」や、18年（大7）7月に数日に渡って、相山高等女学校や県会議事堂での「本社お伽団創立三周年記念お伽講演会」など、大きな催し物を実施している。

それに、もう一つの大きな取り組みといえるのは、『兎の耳』の出版であった。児童雑誌『兎の耳』は、19年（大8）6月、大西巨口個人によって発刊された。『赤い鳥』のような「純真で美しい子ども達への読み物をもっと安易に地方化して子ども自身が興味を持ち親しみをもつように、子どもの作品も登載」しようというのが、その目的であった。しかし、まもなく出版が行き詰まり、翌年には名古屋新聞社発行となる。出版数も増えて多いときには1万部、全国にも出されたが、24年（大13）に新聞社の都合で廃刊される。およそ2年後、再び巨口の手によって刊行され2年ほど続いたらしい。『兎の耳』では、巨口のほかに、亀山半眠、太田雅光、鈴木夢平、稲熊桜陰、石原由三郎、石黒秀久、村瀬ヲサム、武井三省、吉川正雄、杉浦秋次郎、柳田與生などの口演童話家が主に執筆し、その童話は話材にも用いられたが、子どもたちにも好評をもって迎えられた。

1921年（大10）には、新愛知新聞社の松永亮逸と古田昂生が中心となって『宝の玉』を発刊する。なお、新愛知新聞社と名古屋新聞社は、42年（昭17）9月1日に合併し、中日新聞社となる。

口演童話活動を始めた半眠と巨口が、たまたま新聞記者だったので、名古屋新聞というマスメディアの圧倒的な宣伝力を利用することができたわけだが、これによって、口演童話は名古屋と周辺地域に一挙に広まり、しかも教育界の人々を巻き込んで、各地に共感者、実演者を増した。それと同時に、活動の場となる寺院や地域に子ども会の誕生を促したのである。このように、半眠らの先見性と熱意とともに新聞を介したことが、この地方の口演活動を広範囲に行き渡らせることとなったのである。

第3章 最初の児童奉仕活動：市立名古屋図書館

明治末から継続されている、いとう呉服店の新年の「子ども会」と、名古屋新聞社のお伽団の活動に加え、大正期にこの地域の口演童話活動の発展に重要な働きをしたものに、市立名古屋図書館が上げられる。同館は、1923年（大12）10月1日の開館当時から児童室が備えられ、児童奉仕活動に熱心に取り組んでいる。開館まもない12月16日に「第1回お話会」を行い、その後も全国や地元で活躍する口演童話家を招いて、年1回児童大会を開催する。翌24年（大13）1月からは、「お伽ばなしの会」と名付けられたお話の時間が主に図書館員によって始められ、また、25年（大14）10月には、「名古屋児童図書研究会」を発足させ、毎月の例会と月2回の調査委員会を実施し優良図書選定を行っている。

児童室のある図書館とお話の時間の設置という点から見ると、東京の「大日本教育会書籍館小学生部」が1887年（明20）に、大橋図書館が1902年（明35）に小学生に公開しており、公立図書館では、山口県立図書館が03年（明36）に最初に児童室を設けている。愛知県内では、豊橋市立図書館（1913年開館）がもっとも早く、15年（大4）に児童閲覧室が作られ、岡崎市立図書館は、22年（大11）の創立時に児童室が設けられていた。お話の時間の最初は、函館図書館（1909）、石川県立図書館（1912）に

続いて、23年(大12)には、岡山、岡崎市、鹿児島、徳島、名古屋市などで実施されるようになった。このように、市立名古屋図書館は、開館時に児童室を持ち比較的早い時期にお話会の実施に踏み出したのである。

市立名古屋図書館で、児童奉仕を率先して実施したのは、おそらく館長の阪谷俊作と掌書部長の森川紫気の二人であったろう。初代館長の阪谷俊作は、京都帝国大学文学部を卒業した後、東京帝国大学付属図書館の嘱託として同館長の和田万吉(1865-1934)の指導のもとにあった。和田万吉は、図書館界の先駆者として日本図書館協会の創立期から尽力し、日本で最初に図書館学を唱え、その組織化を行った人である。阪谷俊作は、市立名古屋図書館創立に際して和田万吉の示教を受けており、同館主催の第1回講演会に万吉を招へいしている。その時の講演で読書について述べる中に、子どもの時から読書の習慣を持たせることが大切であり、それには子どもの趣味から書物に近づけること、面白いお話をして聞かせることも児童図書館の仕事であると述べている。⁽⁴⁾ 阪谷俊作が館長自ら率先して児童奉仕活動を実践したのは、このような和田万吉の少なからぬ影響によるものと思われる。

また、森川紫気(本名、美添鉉二、1883-1962)が、1922年(大11)に帝国図書館より市立名古屋図書館司書として赴任した。かつて、彼は巖谷小波の門下生で「木曜会」にも参加していた。市立名古屋図書館で、阪谷俊作、森銑三(1895-1985)とともに「お伽ばなし会」の話し手を勤めるなど、児童奉仕活動には熱心で、子どもの読書への導入として口演童話活動にも力を注いだ。さらに、1911年から6年間同館に勤務した都島紫香(1911-1979)は、森川紫気から「紫香」という名をもらったが、資料の整理保存など、多くを教えられた。その都島紫香が、「第1回お話会」に始まる児童大会の開催を「図書館という立場からの口演童話活動を推進するため、プロジュサーとしての紫気の活動といえよう」⁽⁵⁾と述べていることから、紫気の影響と貢献度が推測できる。

1923年12月16日の「第1回お話会」には、天野雉彦を招いて開催、翌年の「一周年記念児童お伽大会」と29年(昭和4)の第8回には巖谷小波を、25年(大正14)の「二周年記念大会」には久留島武彦を招いている。間に4年ほど空白期間を置くが、小波逝去の後、34年と35年(昭和9、10)に名古屋市公会堂で各々4000人近い観客を迎えて「児童大会小波祭」が盛大に行われた。こうした児童大会は、13年間に都合10回催されている。

開館4か月の24年(大13)1月からは、図書館員による「お伽ばなしの会」が始められ、時折外部からの応援も加わり、36年(昭11)までに100回実施された。1月13日の第1回は、森銑三の「手なし娘」、阪谷俊作の「鼠のお家」、森川紫気の「おもちゃ合戦」の3話であった。1週間後の20日には、森銑三の「鼠色の男」、植松安の「佛国から英国へ飛行機で飛んだ話」、阪谷俊作の「七夕の口碑」が話され、第3回の27日には、前後2回に分けて開かれ、どちらの会も森川紫気と森銑三の二人が話した。ほとんど会が日曜日の午後に行われている。都島紫香が出した100回の集計によると、最も多く出演したのが塚本勝雄(53回)、続いて森川紫気(28回)、森銑三、近藤重松、鈴木信子(3人とも16回)で、その他にも10人位の図書館員が実演している。⁽⁶⁾ 外部からは、小池長、吉川正雄、古田昴生、亀山半眠、田島泰巖、平井潮胡、鈴木夢平、松永亮逸ら、地元の口演童話家が加わった。

こうして阪谷俊作と森川紫気が進めた児童大会やお伽ばなし会は、この地域で始めて公的な機関で

のお話を子どもに聞かせるサービスであった。誰でも自由に参加できるという点では、得意先の子どもを対象としたいという呉服店の「こども会」や、学校や子ども会で単発的に開かれる「名古屋新聞お伽団」のお伽噺会とも性格を異にし、不特定の子どもたちにお話を聞く機会を数多く与えたのであった。同時にこれらの行事は、図書館員の間にお話の実演に関心を持つ人を大勢育てることにもなった。お伽ばなし会で実演した図書館員が十数人いたと先に述べたが、当然これは児童室の担当者だけではない。この中から、グループを作って口演童話の研究と活動に加わるものも出てきたのである。

第4章 さまざまな口演童話活動グループと小池長

「名古屋新聞お伽団」や「新愛知童話倶楽部」が各地へ出かけて童話を聞かせ、それが新聞で知られるようになると、学校関係だけでなく既にあった宗教関係の子ども会や日曜学校から出張口演の依頼が続々と寄せられる。そのような集まりのないところでは、童話を聞かせるために子ども会などを作ったところもあったという。一方、いろいろな口演童話活動が生み出した多数の後継者と研究グループは、発表する場を求め、自分たちで子ども会を作ったり、いくつもの会を掛け持ちする人もいた。また、都島紫香は、「いろんな人たちが心の赴くままに子供会場に来て、先輩の話を聞いたり、自らも語ってその批評を受けたりしていた。番茶1ぱいの接待を受けるだけで、電車賃バス代を負担しての修練である。」と述懐している。^⑦ このように、大正期の半ばから昭和の前期にかけて、今まで述べた百貨店や各新聞社、公共機関による単発的な行事と、図書館の活動に加えて、あちこちの学校に童話好きの先生がいたり、寺院や地域の子どもの集まりには専属の童話家が話すというように、さまざまなかたちで口演童話活動が繰り広げられたのである。

ところで、当時どのような子ども会があったか、名称を数例上げてみる。名古屋新聞に掲載された子ども会は、妙行寺少年会(1917年7月)、林松寺小供会(同9月)、崇徳寺少年会(同)、泰蔵寺子供会(20年8月)、起町本誓寺日曜学校(21年7月)、明忠院仏教少年少女会(22年7月)、龍興寺少年少女会(23年7月)、日宗少年少女会(23年7月)と続き、24年(大13)になると十数ヶ所とさらに増している。小池長の口演日誌の23年3、4月の記録には、宗心院コドモ会、白鳥コドモ会、南谷コドモ会、秋月院子供会、想念寺子供会、護国少年会、蓮友コドモ会が見られる。^⑧ 都島紫香が所属していた児友学園の活動場所は、真求寺子供会、浄教寺子供会、桜花日曜学校、千種日曜学校など多数あった。^⑨

また、たくさん出現した口演童話研究グループの中で都島紫香が記録したのは、以下の11グループで、その嚆矢ともいえる児童教化研究会(22-39年)をはじめとして、太陽童人会、名古屋童話協会、みそら童話研究会、尚友講和会、児友童話研究会(児友学園)、常滑少年少女会、ポッポ童話研究会、胡蝶童話研究会、愛護童話研究会、仏教童話研究会などだが、これらの他にも多数あったという。それほど口演童話は、子ども側でも大人側でも盛んになっていたのである。

一方、ラジオ放送が開始されると、ラジオを通して、さらに多くの人々に口演童話を届けることになり一時は人気を得る。口演童話の放送に尽力したのは亀山半眠で、かれはNHK名古屋放送局(25年放送開始)の設立に加わり、やがて教養部門の責任者になるが、その時、口演童話の放送を目的としたアンテナクラブを結成した。メンバーは、半眠と鈴木夢平(名古屋新聞)、松永亮逸(新愛知新聞)、

平井潮胡（名古屋毎日新聞）、森川紫気（市立名古屋図書館）、小池長（門前小学校）の6人であった。JOCK 午後6時の「子供の時間」には童謡や童話などが放送され、25年（大14）9月4日には、小池長が「金角大王」を話している。しかし、放送では話し手も聞き手も互いに表情を見ることができず、音声だけの口演童話にはおのずと限界があって、広がりを見せなかった。

さて、大正から昭和前期にかけて、このように活発に行われていた口演童話活動を、この地で力強く推進し、全国的にも活躍したのは、小池長である。学生時代より子ども会などで势力的に活動が続けていた長は、講堂のある門前小学校に移ると、金子檜雄校長のもとで、まず25年（大14）10月1日、久留島武彦を講師とした童話会を開く。この時、長は、武彦の弟子となっている。翌年以降も毎年、岩谷小波、岸部福雄、天野雉彦、阿部季雄という当時一流の童話家を招いて開催した。やがて、口演童話を志す人々に呼びかけて「名古屋回字会」を起こし、同小学校作法室を会場に話方の研究会を発足させた。久留島武彦、阿部季雄、榎葉勇、内山憲尚、天野雉彦、崎山草多路などを講師とし、森川紫気、塚本勝雄、天野高夫、出村孝雄、都島紫香らが集まった。29年（昭4）9月になると長は教壇を去り、半年後、園長として雲竜幼稚園を開園するが、今度は同園を会場に、31年（昭6）5月20日から22日の3夜連続で話方講習会を開く。講師は久留島武彦ただ1人だった。このように、長は、先輩の童話家を囲んで研究する場を同好の人々にひらいたのである。

だが、このような自由な活動は、太平洋戦争によって極度にさまたげられた。戦時中の童話会は、国策に対して協力態勢をとるとともに、ゆがみを生じ、しかも次第に活動を縮小せざるをえなくなったのである。

* * *

明治半ばに始められた口演童話が、大正期、昭和前期にかけて盛んに行われたのは、時代の求めているものを持っていたからである。一つには、子どもたちに歓迎されたという面である。当時、児童雑誌や図書が出版されてはいたが、一般の多くの子ども、つまり児童大衆には容易には手に入られる状況ではなく、他に子どもたちの娯楽のための文化は少なかった。従って、読む童話ではなく聞かせる口演童話ならば、だれでもそこに行きさえすればよく、1度で大勢楽しむことができたのである。二つめには、口演童話が、大人たちにも納得させる面を持っていたということである。つまり、口演童話は、学校教育や当時の子どもたちを取り巻く文化的環境の不備に対し、補足しうる可能性を持っていた。口演童話を媒介として、子どもと大人の今までにない関係が生まれたのである。三つめには、直接語りかけるといってお話のもつ力であり、しかも、児童大衆へ訴える力もあったこと、同時に、語る側にも充実感をもたらしたことである。

名古屋と周辺地域において、大正期に一挙に広まりをみせたのは、文化的環境の乏しさを背景にまず子どもの娯楽への欲求に呼応していったことであり、その普及の媒介者としての名古屋新聞などによってマスコミに乗ったこと、教育に関係する人たちの支持を得たことがあげられる。それらに加えて、百貨店、図書館でも、この種の継続的な行事と活動が続けられたこと、そして推進者としての亀山半眠、大西巨口、小池長らのすぐれた口演童話家たちが育ち、かれらが後継者を育成しながら、地

道な活動を続けたことが、この地に口演童話活動を根付かせることになったのである。

注

- (1) 前列に岩谷小波、その後に久留島武彦、左に太田常彦、手品のお伽丸柳一が写っている。(撮影年月日、場所不詳)
- (2) 松坂屋社史の編纂者、高木直哉氏が「子ども会」についてまとめた記録より引用。
- (3) 大西巨口は、「童話五十年の懐古」のなかでこのお伽噺会の日付を同年7月25日としているが、このたび名古屋新聞の記述から、これは間違いで、6月末あるいは、7月初めと推定することができる。
- (4) 和田万吉を招いた第1回講演会は、開館前の1923年3月3日に行われ、その講演内容は、『市立名古屋図書館講演集』（森川鉉二編、1936年）に収められている。
- (5) 都島紫香「名古屋で活躍した口演童話家の追想」⑤（『童話人』1976. 6）
- (6) 同上⑤
- (7) 同上⑦（『童話人』1976. 9）
- (8) 小池長『話道のあしあと』中央講演協会、(1930)、pp. 83～84
- (9) 都島鈴吉編・発行『児友』第1号（1932. 8）、p. 8

参考書目

- ・巖谷小波『我が五十年』東京、東亜堂（1920）
- ・巖谷小波『話の聞かせ方』東京、賢文館（1931）
- ・内山憲尚編『日本口演童話史』東京、文化書房博文社（1972）
- ・久留島武彦『童話術講話』東京、こぐま社（1973年）
- ・小池長『話道のあしあと』名古屋、中央講演協会（1930）
- ・小河内芳子『児童図書館』東京、日本図書館協会（1967）
- ・櫻井美紀他編『語りの世界』第8～15号 東京、語り手たちの会（1988～92）
- ・育ての会、名古屋童話協会共編『愛語』名古屋、童話人社（1976. 4～79. 6）
- ・中日新聞社『中日新聞創業百年史』名古屋（1987）
- ・中部童話人協会編『童話人』名古屋、童話人社（1953. 5～76. 3）
- ・仲 新編『日本子どもの歴史5』東京、第一法規（1977）
- ・名古屋市鶴舞中央図書館『名古屋市鶴舞中央図書館50年史』名古屋（1974）
- ・『名古屋新聞』名古屋（1916～25）
- ・名古屋童話協会編・発行『大西巨口と兎の耳』名古屋（1972）
- ・滑川道夫『日本児童文学の軌跡』東京、理論社（1988）
- ・樋口千代松他編『市立名古屋図書館々報』第1～150号 名古屋、市立名古屋図書館（1924. 1～38. 4）
- ・森川鉉二編『市立名古屋図書館講演集』名古屋、市立名古屋図書館、(1936)
- ・文部省『図書館一覧』東京、文部省社会教育局（1927）
- ・弥吉光長・栗原均共編『日本図書館協会百年史・資料第一輯 和田万吉博士の今沢慈海氏宛書翰（抄）』東京、日本図書館協会（1985）
- ・60年史編集委員会『松坂屋60年史』名古屋、(株)松坂屋（1971）